

会報

第 69 号 (2024/11/29)

〒720-0082
広島県福山市木之庄町 4-3-14
Tel&Fax 084-917-5937
Mail
h5s21bm6@ene.megaegg.ne.jp



Community Renaissance
Research Center

今後の予定

連続講座 オカリナが吹けるよ!

12月3日・17日(火) 13時〜

講師: 村山ひろみさん

(福山市立大学名誉教授)

場所: ルネッサンス研究所 集会室

参加費: 500円

現在、先生1名と6人のメンバーで活動しているオカリナ教室です。季節に合った曲を吹いて楽しんでいます♪

シニアボランティア研究会

12月19日(木) 10時〜

場所: ルネッサンス研究所

参加費: 300円

テキスト: 東大高齢社会総合研究機構
(編)『地域包括ケアのすすめ』

もうちょっとでこの本が終わりますが、いつもそれぞれに関わるケアの話で盛り上がっています。

「ケアの社会学」を読む会

12月19日(木) 16時半〜

場所: ルネッサンス研究所

参加費: 300円

読む本: 上野千鶴子著『ケアの社会学』

内容: 「第11章: 生協福祉

6. ワーカーズコレクティブの歴史」

(P. 174 から)

「お正月の小物づくり」

12月9日(月) 14時〜

場所: 地域の絆すまいる仁佐

参加費: 1000円 詳細は別紙チラシにて

今号の内容

仁佐音楽祭に参加しました
映画『アザー』〜認知症の症状を体験できる映画〜
備北地域の施設見学記
年会費支払いのお願い
編集後記

※ 内容は以下に記載



活動報告

仁佐音楽祭に参加しました

11月4日、仁佐広場にて「仁佐音楽祭」が開催されました。私たちのNPO法人も去年に引き続き参加しました。バザーにてお子様が楽しめる「つりぼり」を出店致しました。

NPOのオカリナ教室「アマンティ オカリナ」の皆さんが5曲演奏しました。地域の絆の皆さんも一緒に歌を口ずさんで楽しんでくださいました。



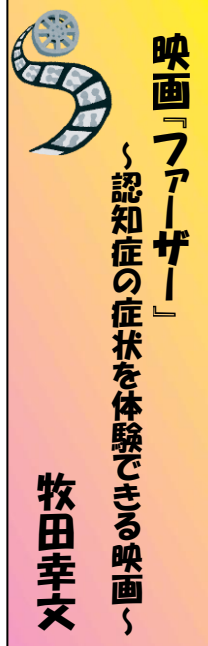
アマンティ オカリナさんの皆さん



施設の職員さんのバリの踊り



つりぼりの様子です♪



2021年に公開されたイギリスの映画『ファアザー』は、名優アンソニー・ホプキンスが認知症の高齢者を演じ、その圧倒的な演技が多くの人々から絶賛された。この映画は、高齢者介護について研究する私にとって必見の作品でした。しかし、私自身も認知症の父を妹と共にケアしていることもあり（主に妹がケアを担っているのですが）、観ることにためらいがありました。その理由の一つが、映画のタイトル『ファアザー』でした。私はタイトルから、「偉大な父が老いていく姿と、それを献身的に支える娘たちの美談」というような、家父長的な構図をイメージしてしまっていたからです。

私は、ケアは家庭内に限られず、社会化されるべきだと考えています。そのため、理想化された家族ケアの物語を見るには抵抗がありました。現在では、認知症高齢者は訪問介護やデイサービス、グループホームなどの支援を受けながら、地域社会の中で暮らし続けることが可能になっています。家族の負担を軽減しつつ、認知症高齢者ができるだけ生活サイクルを維持して地域で暮らすことが理想的であると、私もフィールドワークを通して論じてきました。しかし、ここ数年、私と妹の生活にも限界が訪れ、父のケアを家と地域ケアだけで支えることが難しくなり、いろいろ悩むことがありました。そんな中、夏休み中に、実家で妹に代わって数日間父

の世話をする事になり、その合間に、懸案だった『ファアザー』を観てみることにしました。映画の中で描かれる父と娘のやりとりや葛藤は、私たち姉妹と父とのやりとりと驚くほど似ており、まるで私たち自身の姿を見るようでした。映画は、介護をする側とされる側双方の苦しみや混乱、そして困惑を深く描いたものであることに気づき、心を動かされました。

この映画は、主人公アンソニーが日常生活の中で記憶を失い、混乱している様子をリアルに描いています。しかし、単に混乱して周囲の人々を困惑させるだけではなく、さまざまなシーンに記憶違いや認知の錯誤を感じさせる巧妙な演出が散りばめられています。これによって、観客も認知症の人が感じる思い違いや忘却への苛立ち、困惑を疑似体験できるようになっているのです。つまり、観客が認知症の混乱を「体験」することで、客観的に理解するのではなく、主体的にその苦悩を理解する仕組みになっています。

映画の舞台は主に家のキッチンやリビング、寝室、診療所、そして最終的には高齢者介護施設の部屋といった場所が中心で、アンソニー（父）は自身がどこにいるのかを理解できず、最後には誰と会話しているのかさえ混乱し、悲しみに打ちひしがれます。また、場面に登場する彼の腕時計も重要な鍵となっています。アン（アンソニー）のケアを日常的にやっている長女（のパートナー）が腕時計を持っていると思い込んだり、介護ヘルパーが

盗んだのではないかと疑ったりすることで、所有物が知らないうちに奪われる不安や恐怖が描かれています。

あるシーンでは、日々世話をしているアンに対して、アンソニーが嫌味を言い募り、激しい口調で怒りを露わにし、ついには自分の財産を奪おうとしていると彼女を非難します。記憶が曖昧な状況を悪用され、アンとそのパートナーに所有物を奪われてしまうのではないかとという猜疑心が募っていくのです。その様子に、介護ヘルパーがアンに同情の眼差しを向ける場面もあり、この日々の言い争いと認知症高齢者の物言いの辛辣さや攻撃性は、見ている心が痛むものがあります。

また、この映画の特徴の一つは、説明が一切ないことです。観客は登場人物の会話や場面の变化から、関係性や状況を読み解くしかありません。アンソニーとアンが会話する場所はキッチンやリビングといった日常的な空間ですが、シーンごとにインテリアや内装が微妙に異なり、その違いと会話の内容からアンソニーの混乱を感じ取ることができるようになっています。物語が進む中で、アンソニーが自宅にいいのか、それともアンのフラット（イギリスでは集合住宅・マンションを「フラット」と呼ぶ）に引き取られているのか、あるいは高齢者施設の自室にいいのか曖昧になり、視聴者も彼の混乱に巻き込まれます。映画内では、時や場所についての説明がないため、アンソニーの記憶の喪失とそれによる不安を観客も同じように体験する仕掛けになっています。

さらに、登場人物も場面によって変化します。最初にアンソニーと話していたアンが、次のシーンでは違う女優により演じられており、アンソニーは「誰だ？」と思いながらも、娘のアンとして話を続け、記憶違いに戸惑う様子が描かれています。映画は、「誰」と「どこで」そして「いつ」を少しずつずらしながら、アンソニーが認知症によって精神的に追い詰められていき、最終的には自身の居場所や状況を見失っている様子を描きます。悲しみに沈む彼を励ますのはアンに似た高齢者施設の介護職員であり、実は彼が数ヶ月前から高齢者施設で暮らしていることが明らかになるラストには、観客も「え？」と驚き、自分が映画の構成によってまるで認知症の世界に巻き込まれていたことに気づきます。

認知症の症状を映画で疑似体験することに驚きと恐怖を覚えました。同時に、私も今まさに「誰」と「どこで」「いつ」が曖昧になっている父と向き合いながら、多くのことを考えました。

『ファーザー』（2020 年） 監督 フロリアン・ゼレール、
インターフィルム



備北地域の施設見学記

加納三千子

Ⅰ はじめに

最近いくつかの施設を訪ねました。すると、約 20 年前広島で聞いた「ともいきの里総領」の熊原保施設長の話を思い出し、今はどうなっているのか、と思うようになりました。

そこでホームページを見ると、施設名は「社会福祉法人優輝会」（通称「ゆーしゃいん」、優はユウと、輝はシャインにおき変えて。以下「ユーシャイン」または「ゆーしゃいん」と表記）に変わり、備北地域をカバーするように高齢者・障がい者のための生活支援施設が点在¹⁾していました。さらに代表理事は熊原さんから森重利夫さんに代わっていました²⁾。

こんな驚きの連続の中、久しぶりに熊原さんにお会いしてお話を聞き、代表理事を引き継がれた森重さんの話を聞き、いくつかの施設を視察することができました。

これまでの施設訪問はホームページを見ただけでした。しかし今回は、次のような疑問を持ちながら訪問しました。すなわち、①なぜ広範囲にケアのネットワークが作れたのか、②熊原さんはどのような経歴でこの事業をされたのか、③これらの施設見学から私たちが学ぶことは何か、を考えながら。

Ⅱ 代表理事の森重さんからの話

開口一番森重さんは、代表理事を受けるときに「私は熊原さんのようには出来ませんから」とも言われ、「だから、僕は熊原さんから次の人に（この施設を）渡すのが役割だと思っています。」

とおっしゃりながら、自分が今やろうとしていることを話されました。

その一つは、三次市・庄原市の施設全体をブロックに分け、それぞれのところで議論をしてもらうようにしたと。その根拠は、「（熊原）理事長は私たちよりずっと先を見ていらつしやる。みんなそのスピードに何とか追いつこうと働いている」（熊原）理事長は、時代の変化に合わせて必要な施設を作られています」と言う記事³⁾にあると思いました。すなわち、職員など施設に関わる人たちもそれぞれこの施設に必要なことは何かを考えて欲しいと言う、森重代表理事の想いがうかがえました。

また、これからの高齢者人口の変遷を見据え、高齢者が減少したときのことでも考えた運営をめざしたい、ともおっしゃっていました。

Ⅲ 「ゆーしゃいん」の施設を訪ねて

森重理事長に案内してもらった「ゆーしゃいん庄原」は地域共生型福祉施設、小規模多機能型居宅介護事業所となっているが、一つの建物の中に高齢者の通所施設、居住施設などがいくつかの種類⁴⁾の施設が入っていました。

次いで、向かいのユニバーサルケア「みとう温泉」を施設責任者の案内で視察しました。1階は障害者の就労支援施設で、2階は障害者の方の住居に、1階では障害者の方がワープロ入力、高齢者の方も新聞記事をとめる⁵⁾など、人々に動きがありました。

その後三次市に移動して、「ゆーしゃいんCCM」と「ケアハウス吉舎」をたずねました。

「ゆーしゃいんCCM」には障害者のグループホームと、就労支援の場と働く場として、レストラン、パン工場などがありました。レストランの一般公開は土、日だけ。平日はこの施設内の昼食⁶⁾

くりをしているとのこと。その他さまざまな就労支援に取り組みました。

「ケアハウス吉舎」は軽費老人ホーム、デイサービスセンターとなっていました。就労支援を受けていると思える方が施設内の掃除をしている姿も見かけました。

施設の方から聞いたわけではありませんが、今回の施設訪問では、車イスなどにただ座っている高齢者の姿は見かけませんでした。見学する側も、夢のみずみ村などのように自分が選り決めた事に取り組んでいる、すなわち働いている姿からは元気をもらいました。

IV 備北地域に広範囲なケアのネットワークがなぜできたのか

1. 弱者に対する国連の取り組み

まず、①熊原さんと優輝会の歴史、②社会的に弱者と思われる人への国連の取り組み、③長野県の施設「アザレアさなだ」10周年記念誌⁴⁾の中にある施設等や成立順に並べた年表を作ってみると面白いことが見えてきました。

これまで高齢者を含めた社会的弱者は保護することが大切で、それが福祉だと考えられてきました。ところが1970年から1999年までの約30年間に、国連から社会的弱者と考えられていた障害者(1975年、障害者の権利宣言など)、女性(1979年、国連女子差別撤廃条約など)、高齢者(1991年、高齢者のための国連原則など)の労働を軸として人権を守る提案と取り組みがおこなわれています。

こうした国連での対応をうけて、全国初の認知症の人の施設「きのこ荘」(1981年、岡山県井原市)、デイサービス施設のモデルとなった「宅老所よりあい」(1990年、福岡県福岡市)、備北地域のケアネットワーク作りのスタートになる「ユーシャイン総領」(1991年、

広島県総領町)などが設立されています。備北地域のケアネットワーク作りも地球規模でのそうした取り組み推進によるものであったと思います。

2. 背景にある地域の文化

中国地方の日本海と瀬戸内海の中央部にあたる岡山県新見市、広島県東城町、庄原、三次と、山間部にしては歴史を感じさせるまちが横一列に並んでいます。考えてみたら、福山市など海岸沿いのまちは、たかだか江戸時代に干拓で栄えはじめたところ。中国山地に住む人たちが、長年暮らしのなかで培ってきた文化があるはずだと思います。

その文化としてまず思い浮かべるのが「お祭り」と「手間換え」ではないか。「手間換え」とは、田植えなど重労働の農作業を住民の「協働」により軽くするもの。

祭りとしては、農作業前の4月3日、近所の高い山に登って餅や「ごちそう」を食べる。田植えが終わったときは、「ごちそうを作り皆で慰労し合う」「しろみて」。(これは広島県の山間部の言い方で、「苗代がみてた」苗がなくなった」と言う意味で、田植えが終わった意味)。稲刈りの前には、「収穫への感謝」と「これから大仕事」を頑張ろうとお祭りに集まって騒ぎます。こうしたことは、私たちの大先輩たちが苦しい労働のなかで考えた工夫であり、文化でもあると思います。

1982年に総領町役場に勤めていた和田芳治さんが「過疎を逆手にとる会」(熊原さんが事務局長をはじめています。祭りの文化を現代的にアレンジしていると思います。永六輔さんと呼ぶなど、いろいろな行事を考えて楽しみ、騒いでいます。

1990年の社会福祉法人総領福祉会(優輝会)の設立や1991年の「高齢者福祉総合センターユーシャイン」の開所、その後の備北のケアのネットワーク作りは、こうした「まつり」のエネルギーが背景にある

のではないかと思います。

3. 苦難の時代を乗り越えて

しかし、若者たちのそうした動きを苦々しく思うて眺めていた人たちもあつたと思います。それが1994年の寄付金事件であり、その責任をとって熊原さんは退職⁵⁾されています。総領を去って7年。その間「音戸町保健福祉総合センター」の立ち上げや、乞われて奈良県十津川村の「高森の郷」の施設長にと、家族を含めて大変であつたと思います。

しかし2002年には、「法人の立て直しをして欲しい」とふたたび熊原さんを「ユーシャイン」に迎えています。そして、ゆーしゃいんの代表理事を森重さんに譲るまでの21年間、障害者であろうと高齢者であろうと、「役に立ちあい」村全体が拡大家族のように共に生きるまちづくり」をモットーに歩んでこられたのだと思いました。

V おわりに「これからの生き方を見つけるために

「ゆーしゃいん」の施設の中には、トータルケアホーム「ゆう愛」⁶⁾がありました。総領町に和室または洋室の8畳程度の居室にバストイレ、台所がついたサービス付き高齢者住宅のような部屋が6室。その他、廃業した旅館や別荘を活かした小規模多機能型介護事業所なども設けられていました。ユーシャインのことが掲載されている本によると、これらの施設は、「地域のような施設、施設のような地域」づくりをめざして作られたといえます。

こうした地域作りは過疎地域だけが取り組む問題だろうかと思えます。少子高齢化に核家族化が進み、住民同士のコミュニティが希薄になっている上に、独居高齢者が増えているいまの時代、都市部と言われる地域の方が高齢者問題を真剣に考えなければならぬと思えました。

拡大家族のような地域作りのためには、人口減少や高齢化の増加などに取り組みられてきた「ゆーしゃいん」や「の浦」などの取り組みを参考に、いかに地域づくりをするかだと思います。沢村は「老後ひとり難民」⁽⁸⁾にならないためには、近隣や地域社会とつながり社会参加をすることだと述べています。

今回の備北地域の施設訪問は高齢者が人生の最期まで自立した生活をするには大きな課題が横たわっていることを気づかせていただきました。

「ご案内いただいた皆さま、ありがとうございました。」



- 注
1. 指田志恵子：里山資本主義の出番です、あけび書房、2015
 2. 熊原さんはこの四月から東城町で社会福祉法人が医療法人から移譲を受けた施設（社会福祉法人恵仁会「ぶしの里」）の理事長になられた。
 3. 優輝会：youshine「あなたが輝けば私も輝く、（30年記念誌）」、2020
 4. 宮島渡：地域でねばる「アザレア」などの挑戦、筒井書房、2004
 5. 津山千恵：創ることは壊すこと、あけび書房、1999
 6. 津山千恵：トータルケアホーム「超高齢社会を乗り切る法」、三一書房、1996
 7. 羽田富美江：介護が育てる地域のちから、の浦さくらホーム、2015
 8. 沢村香苗：老後ひとり難民、幻冬舎新書、2024

会費納入のお願い



2024 年度の会費がまだの方は、納入をお願い致します。大変恐縮ですがよろしくお願い致します。

【宛先】 ゆうちよ銀行

トクヒ「コミュニティルネッサンス研究所」

【ゆうちよ銀行から振り込まれる方】

記号： 15190 番号： 57904531

【他銀行から振り込まれる方】

店番： 518 口座番号： 5790453

編集後記



先日神勝寺に紅葉狩りに行きました。夜間拝観もできるチケットを渡されたので、日中の景色もしっかり目に焼き付けて、改めて出直し、ライトアップできれいに色づく庭園も見えて回りました。

京都で過ごした大学時代、夜間拝観といえば、帽子、マフラー、手袋など防寒対策万全で行っていたのですが、この度はかなり軽装で拝観できていることに大変驚きました。

このまま不思議な気候が続くようなら心配になりますね。

ようやく最近寒さを感じるようになりました。事務所も慌てて冬スリッパに衣替え致しました。

牧田先生の「ファーザー」から介護される側、する側の気持ちの葛藤や苦しみ、混乱の描写にはハッとさせられるものがありました。それぞれにしっかりとした意思や意味を持っている行動だからこそ起こることだと思います。それぞれの思いを尊重することの大変さが本心に伝わります。私も早く映画を観てみたいと思いました。（菊）



NPOへのお便り募集！



「ミルネへのお便り」を募集します。

「感想・ご意見」などをTEL・FAX又はメールアドレスにお寄せ下さい。

問い合わせ・教室参加申込先

NPO法人「コミュニティルネッサンス研究所」
電話・FAX： 084-917-5937
メール： h5s21bm6@ene.megaegg.ne.jp